

書評

浦野聡編

『古代地中海の聖域と社会』（勉誠出版、

二〇一七）

桜井 万里子

本書は、編者浦野氏（以下敬称略）による「はしがき」冒頭に明記されているように、二〇一四年六月開催の日本西洋史学会第六四回大会の小シンポジウム「古代地中海世界における聖域と社会」を契機に誕生した。構成は、編者による序章に続く四部と編者による「あとがき」となっている。編者浦野の熱意が直に伝わってくる構成である。

序章「古代地中海聖域の精神的・身体的トポグラフィ」は、大きい視野で人類史を初期から眺望し、聖域の誕生、成長の意義を考えようと、人類学的・考古学的アプローチをとった結果、キリスト教社会への転換に先立ち人々の精神・メンタリティーの変化があったという解釈に到る。この解釈のもとに、ギリシア・ローマ的な都市の伝統的聖域からキリスト教的聖域への移行過程を考察の対象とする問

題提起がなされる。

このような大きな展望のもとに宗教的傾向をとらえようとする問題意識には共感できるが、浦野の専門がローマ帝政期から古代末期であるだけに、帝政期に到るまでの地中海世界における人々の信仰についての叙述にはややものたりなさを感じる。他方、浦野の専門である帝政期以降については、アクシオッタの聖域における奉納碑文の意義と背景となる時代精神の傾向に関する考察は迫力があり、読みごたえがある。

I部「古代ギリシア」

上野慎也による第一章「郊外―古典期のアテーナイ」は、言葉を大事にする上野らしく「聖域」という語の対象について思索し、とりあえずは、ポリスがホシアアの質をもつ、従って聖域であるとする立場から、ポリスの郊外あるいは都鄙の関係の実態を探ろうとする。都鄙という語からドウ・ポリニヤツクの提示したテーゼとの関連に気付く。それは、ポリス成立の際に、中心市と郊外の聖域のあいだを祭列が往還する範囲が都市の領域として確定された、とするものである。したがって、ポリスの特質を解明するには、郊外の聖域について探究する必要があるということになる。その前提は正しい。

上野は郊外に注目し、具体的にプラトンの『パイドロス』のテクストを中心に分析し、そこで郊外がどのように意識されているかを読み解こうとする。関連の文章に丁寧な和訳を施し、そこから「郊外」において語るソクラテス像を浮かび上がらせ、ソクラテスと郊外の自然がいかに密接な関係にあったかを導き出す。訳文に手抜きはない。上野の古典ギリシア語読解能力の高さは敬服に値する。ただし、この「郊外」を原典から掌握する試みはエミック *emic* な方法だが、ここでは適切とは言いがたい。なぜなら、ドウ・ポリニヤックの方法はエティック *etic* だからである。ポリスに関して、都鄙の関係を探ろうとするならば、たとえば、上野も言及しているエレウシスや、あるいはマラトンなど、中心市からの独立性をうかがわせる地域、聖域に現存史料を手掛かりにアプローチするという方法もあったであろう。師尾晶子による第二章「奉納物からみた聖域と社会」は、関連する情報を可能な限り正確に提供するという姿勢にもつき作成された信頼できる論文となっている。我々が奉納物と奉献という行為にアプローチする方法は、現存する遺物としての奉納物と奉献の事実を刻した碑文史料とを通してである。そのような史資料が比較的多く残っているアテナイのアクロポリスを主たる対象に選んだ師尾氏の狙いは、適切だったと評価できる。史資料の分析によっ

て、前四三〇年代ころから前五世紀末までの間に決議碑文は二〇〇枚以上にのぼり、碑文建立文化のピークに達したうえに、前四世紀にはいると顕彰碑文と奉納像が増加したと指摘する。アクロポリスにおけるこのような奉献碑文や顕彰像の設置は、奉献者の威信を高揚させ、さらにギリシア世界におけるアテナイの存在感を広く高める結果となった、と結論する。碑文文化という視点からアテナイの文化的隆盛の一端を描いて興味深い。

ただし、割り当てられた紙数の制約があるため、アテナイのアクロポリスに焦点を絞って論じるという方法はやむを得ないものの、やはりアテナイは特殊な事例であるので、その結論をギリシア世界全体について敷衍するにはいささかの無理があるだろう。したがって、聖域に奉納物もたらされることや、その聖域の重要性を明示することになるとともに、聖域を管理するポリスと奉納者とのせめぎ合いがそれぞれの聖域の在り方を特徴づけていたという結論については、いささか論証不足と言わざるを得ない。

II ヘレニズム

イアン・ラザフォードによる第三章「ネットワーク理論と神聖使節団テオリアのネットワーク」は、既刊の *Greek and Roman Networks in the Mediterranean*, 2009 に収

められた論文の竹尾美里による和訳である。古代ギリシア各地に所在する聖域には、ポリスの領域を超えて宗教的威光が及び、祭儀開催時には他ポリスから多くの信者が訪れる聖域も少なくなかった。そのような聖域に信者を送り出すポリスは、祭儀開催に参加するための正式の使節団を派遣した。この使節団がテオリアであり、使節はテオロス（複数はテオロイ）といった。他方、祭儀開催の聖域を擁するポリスがテオリアを受け入る際の担当役がテオロドコイである。いずれも神殿会計目録などに記されていて、史料が少ない古代ギリシアに関して比較的豊富なデータが得られることから、ラザフォードはこの史料に注目したのだった。一方がテオリアを派遣し、他方の受け入れ側はテオリアを歓迎するテオロドコイを用意する、という一種の宗教的外交システムは、ヘレニズム時代に顕著となる。表題の「テオリア・ネットワーク」とは、テオリアの活動に基づいたネットワークと定義されているが、現存する史料に聖域と特定のポリスとの関係を示すものが多いことから有効であろうとの想定に基づき採用するのが、社会的ネットワーク理論である。

この理論に依拠し、現存するデータを収集、整理して、著名な聖域についてネットワークの存在を描き出し、テオリア・ネットワークがギリシア世界のすべての都市をつなぐ主要な手段としての役割を持つ、という魅力的な仮説を

導き出す。しかし、古代世界研究に付随する、史料が限定的であるという現実のゆえに、上の仮説以上に具体的な機能について提示するまでには至っていない。だが、今後発掘が進み、より多くのデータが得られるならば、有効な成果もあげられるのではないかと期待したい。竹尾美里の訳文と解説はわかりやすく、訳注も親切である。

ヘレニズム時代に関しては、ラザフォードの既刊の論文を翻訳して充当せざるを得なかったということだが、このことは日本のヘレニズム研究の弱さを示しているわけではないだろう。近年優れた研究成果を發出する若手研究者が少なからず現れてきている。そのような若手に寄稿を求め、することもできたのではないだろうか。惜しまれる。

Ⅲ 古代ローマ

古代ローマの部に入って最初の、中川亜希による第四章「古代ローマ西方の聖域と社会」は、共和政期ローマの聖域を取り上げる。全ギリシアの規模で信仰の対象となっている聖域が相当数あったギリシアに比べ、西地中海地域ではどうであろうか。運命の女神フォルトゥーナの神託で名高いラティウムのプラエネステに関する研究が近年多いことに中川は注目する。現存する遺跡は、前二世紀末に富裕なプラエネステ出身の商人たちの資金で建設された聖域

のそれだったこと、フォルトゥーナ女神の聖域の位置確定等々、近年の研究はそれまでの通説を塗り替えている。女神の神託についても、その重要性和影響力は疑問視され、国家祭儀への導入も否定されているのである。

これに対し、中川は現存史料のなかの同女神が言及されている一〇箇所全てを検討し、プラエステネのフォルトゥーナ・プリミゲニアの祭儀は、ローマの国家祭儀に受け入れられたものの、神託の女神という要素はそこから除外された、と結論する。この「部分的な分祀」の背景として、ローマと他のラティウムの人々との微妙な関係の実態があることを、プラウトウスの喜劇の科白を分析することで明らかにする。共和政期前半の社会についていまだ不明な部分が多い研究の現状で、興味深く、貴重な論考である。

藤井崇「皇帝崇拜と聖域―ローマ帝国東方属州を中心に―」も力作である。ローマ帝政期前半の皇帝崇拜について、中央の神格化の原則に依らない属州の皇帝崇拜の実態に注目する。特に帝国東方属州の既存の聖域に皇帝崇拜がどのように取り込まれたのか、という問題を中心に実証的に解明する。藤井の問題意識は、皇帝崇拜を、衰退したギリシア世界によるローマ皇帝への阿諛追従とみるかつての研究を全面的に見直すという、近年のサイモン・ブライス以降の研究動向を踏まえたものである。

地中海東部地域の聖域は、ヘレニズム時代と同様、ローマ帝政期にも時の権力者を自らの宗教的枠組みに取り入れることに成功するが、その場合でも多くは皇帝の宗教的地位は聖域の主神のそれよりも低く、それは聖域の宗教体系が容易には変化しない、という理由に加えて、聖域へ皇帝崇拜を導入する以前から属州、都市、都市有力者らが聖域運営に従事していたから、と説明されている。この伝統的慣行は属州総督と言えども無視できなかったことを、藤井はキプロスのアマテウスやカリヤ地方のアフロディシアス出土の銘文の復元・分析を通して明らかにする。

祭礼行列についても、具体的にエフェソスの民会と評議会の決議銘文とペロポネソス半島トウギュテイオンの聖法碑文を丁寧に読み解き、行列の具体的内容、参加者内訳、行列経路に注目して、いずれにも皇帝崇拜の要素は混入しているものの、皇帝の神格化は避けられていて、帝国中央の皇帝観がここにも反映されていることを明らかにする。

聖域における皇帝崇拜は多様だが、伝統重視の姿勢は貫かれている。また、儀礼行為についても均質性が見られ、帝政期に成立した「ギリシア世界」の確立が広域の情報交換を可能にしたと指摘。ここからビザンツ世界に到る道は近い。これまで十分光の当てられなかった時代、地域を対象に、実証的な手法で皇帝崇拜の実態を明らかにした功績は大きい。

IV 古代末期以降

田中創「後期ローマ帝国における聖域の変容—州民と政府の關係を通じて」は、四世紀に「キリスト教化」が進んだローマ社会の変容の様相を、中央と地方の關係に注目して検証する試みである。従来、勅法を主要史料として国教化の「実態」の説明が試みられてきたが、本稿は近年の新しい傾向である一神教的多神教や多神教的キリスト教という視点を導入し、宗教的混交と当時の齊一的とはいえない心性とを背景とした変容に光をあてる試みである。従来、皇帝権力の行使の在り方を中心に宗教的変容が説明されてきたが、それでは長い年月をかけて根付いていった宗教慣行の変容の実態は十分に説明しきれない。従来の研究では見過ごされてきたこの実態に迫ろうと、田中は最近の研究動向の一端を担い、前進させた。

四世紀のローマ帝国政府の宗教政策は一定しなかった。コンスタンティヌス帝によるキリスト教公認は他宗教の存続を認めていたが、その状況下で帝国政府と都市共同体との關係や地方有力者たちの宗教的活動に変化が生じていく過程を、田中は注意深く辿る。また、既存の神域や聖域などの維持・管理をめぐる、都市市民とキリスト教徒のあいだの争いへの州総督の関与などの具体例にも目を向ける。ローマ帝国がキリスト教国家へ移行するまでの多様な変化

史苑（第七八卷第一号）

の様相は今後も追究される課題であることが明示された。藤井論文、田中論文ともに、複眼的に対象を見ることで移行期の実態を可能な限り描き出そうとする姿勢が頼もしい。再び西方へ目を向け、ただし時代を少し下って、五世紀以降の南ガリアにおけるキリスト教的空間の成立を対象とするのが、奈良澤由美「キリスト教的空間の成立—南ガリアの都市と礼拝」である。一九七二年以来進められてきたガリアのキリスト教地誌研究の成果を継承、発展させる試みで、「古代のトポグラフィーの中にどのようにキリスト教聖堂が建設され、その後どのように中世的風景に変遷していくのか」と問題が提起される。

①古代末期のガリアにおけるローマ都市のほぼすべてに司教座聖堂が建てられた。その設置の具体例として、フレジウス、クレルモン、エクサン・プロヴァンス、アルル等の司教座聖堂の位置、移動の如何、移動の理由等を発掘成果から論じる。②墓地は居住地の外に、という概念は古代末期から継承されることが多かったが、埋葬用のパシリカは都市領域外に設けられ、その周辺に墓がたち並ぶようになり、信仰の一大地区が形成された。③古代都市からさらに離れた場所に建てられる聖堂は、著者の言う「田舎環境」のキリスト教化を促し、中世的環境の形成へと導く。

以上の過程で、方法としては発掘成果や考古調査で得ら

れたデータを主に参照する。従ってしっかりと書いたテーゼを提示するという類の論文ではない。むしろ中間段階の暫定的な報告、と言えるものだが、このようなきちんと手順を踏んだ手堅い研究方法こそが、堅固な理論構築に道を開くことになる。

本書の白眉というべきなのが、最終章浦野聡「東方における聖堂と社会ーリキア西部トロス教会主教座聖堂をめぐる」である。先行する論文のすべてはここに収斂していると言えるだろう。小アジア南部のトロス遺跡における、立教大学の浦野をチームリーダーとする発掘は、二〇一〇年に始まり、二〇一六年に終了した。発掘対象は、都市中央部のバシリカ型聖堂である。その発掘の成果に基づき、トロス教会主教座聖堂の形状、構造、歴史の変遷過程等を明らかにしようとするものである。もとより傍証となる史料がほとんどないなかで、手がかりは、出土資料（舗床モザイク、貨幣）の調査・分析の結果とアゴラの積石壁面に刻まれていた皇帝の布告と指令書の碑文の一部、そして、アクロポリスを取り巻く城壁の再建を記念して東門の基石に刻まれた銘文のみであるので、同聖堂の歴史的意義の再構築は困難を極める。

聖堂の年代はキリスト教国教化時期からさほど遅くない時期とされる。発掘成果はまた、クサントスの東バシリカ

を破壊した六世紀の地震が、トロスの主聖堂の大規模な修築あるいは再建を促したことを伝える。さらに一一世紀に再再建が試みられ、それはついに完了しなかったことも、発掘から明らかとなった。再建から再再建事業までのあいだ、既存の施設を改造した小さな教会堂が機能していたことは明らかで、主聖堂の内外には、古代末期以来の生活圏が存在し、主教を頂点とする聖職者組織が地域社会と帝国を結ぶ役割を果たしていたことが推定される。

このような発掘成果とその分析に基づき、結論として、今後さらにトロスの他の区画、例えば居住区域などが発掘されるならば、古代末期から一一世紀のビザンツ帝国の時代までのトロスの通時的な歴史が解明されようという期待が述べられる。もちろん考古学の門外漢である評者には、出土資料の調査・分析・評価の妥当性について適切に判断を下せる自信はないが、結論にいたる論理構成は合理的であり、説得的である。編者が結論部で明示する期待に評者も共感の思いを強くする。本論文を本書の白眉と評した所以である。

最後に、本書に収められた各論文のレヴェルの高さに、当該分野の今後のさらなる充実を予感してうれしさを感じるとともに、これだけの執筆者をそろえて、一書にまとめ上げた編者の力量、気迫に敬意を表したい。

（東京大学名誉教授）